

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520794

研究課題名(和文)近代黒海国際関係史の基礎的研究

研究課題名(英文)Basic study on Modern history of the Black Sea region

研究代表者

黛 秋津(MAYUZUMI, Akitsu)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：00451980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本における近代黒海地域史研究の確立を目的とし、本研究は18・19世紀における黒海地域の国際化の過程を、オスマン、ロシア、西欧の三つのそれぞれの一次史料に基づき検討した。特に、ワラキアとモルドヴァをめぐる国際関係を従来のバルカン史ではなく黒海地域史の枠組みの中でとらえ直し、さらに18世紀のオスマン政府によるクリム・ハーン国支配を考察した。その結果、黒海周辺のオスマン帝国の付属国支配の変容が、黒海の国際化を考える上で重要であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In order to establish historical studies on the modern Black Sea region in Japan, this study examined the internationalization of the Black Sea region in eighteenth and nineteenth centuries, based on Ottoman, Russian and the West European primary sources. It placed the international relations in Wallachia and Moldavia not in the framework of the Balkan history, but in that of the Black Sea region, and it also examined the Ottoman domination over the Khanate of Crimea in the eighteenth century. As a result, this study revealed that the transition of Ottoman domination over its vassal states around the Black Sea had importance for considering the internationalization of the Black Sea region.

研究分野：近世近代黒海地域史

キーワード：黒海 ロシア オスマン帝国 国際関係史

## 1. 研究開始当初の背景

(1)2000年以降、国際政治学の分野を中心に黒海をめぐる国際関係に対する関心が世界的に高まった。EU、ロシア連邦、トルコが、この海をめぐるせめぎ合う状況は、近代以降この地域が常に大国の狭間に置かれて来た事実を思い起こさせることとなった。一方で冷戦終結後、黒海周辺諸国によって黒海経済協力機構(BSEC)が設立されるなど、地域協力の動きも始まった。このような一連の流れの中で、黒海とその周辺を一つの「地域」として捉える視点の重要性が認識され、本邦においても、2006年以降「日本・黒海地域対話」が定期的開催され、また日本黒海学会が設立されるなど、本格的な黒海地域研究の動きが見られる。

こうした黒海地域研究が本格的に始動する中、歴史学の分野においては未だ本格的な「黒海地域史研究」の動きは現れていないと言える。海外での黒海地域史研究の多くが、西欧・東欧・イスラーム世界のうちの一つの視点からの研究であり、一方国内においては、黒海通商や黒海海運に関する論文はいくつか見られるものの、黒海周辺を一つのまとまりとする「黒海地域史」の研究は未だ見られないのが現状である。このような研究の欠如の主たる理由は、冷戦期にこの空間を一つの地域と認識する概念がほとんど存在しなかったためであるが、同時にこの地域が、歴史学と東洋学、西洋史と東洋史、ロシア東欧地域研究と中東イスラーム地域研究など、ディシプリンの狭間に置かれていたという事情もあると思われる。しかしながら近年世界的に関心の高まるこの地域を理解するためには、歴史学からのアプローチが不可欠であり、特に現代黒海地域の国際関係の構造が出現する、近代以降の黒海地域史研究が重要であると考えた。

(2)本研究のもう一つの背景として、申請者の研究の発展という側面も存在する。申請者は平成19年度より科研費(基盤研究C)を受け、バルカン、特にオスマン帝国の附庸国ワラキアとモルドヴァの2つの公国を対象として、18・19世紀の両公国をめぐる西欧諸国・ロシア・オスマン帝国間の国際関係の変容過程を研究した。その結果、18世紀後半にオスマン・両公国間の宗主・附庸関係にロシアが、その後ハプスブルク、イギリス、フランスなどが介入することにより、それまでオスマン帝国内の問題であった両公国問題が国際的な問題へと転化したこと、そしてこの問題を通じて西欧諸国・ロシア・オスマン帝国が相互に諸関係を緊密化させ、三者が統合の方向へ向かったこと、などを明らかにし、西欧国際システムが周辺帝国を包摂して拡大する過程の一端を具体的に示すことが出来た。しかしながら研究を進める中で明らかになった課題は、18世紀後半-19世紀前半の西欧諸国やロシアの対バルカン政策は、黒

海地域への進出としばしば結びついていることであった。従って、バルカン問題を通じた西欧・ロシア・オスマンの統合と西欧国際システムの拡大、という上の研究課題の本質を理解するためには、三者の対黒海政策全般を詳細に跡付けて明らかにすることが必要であり、その後、その中にバルカンの問題を位置づける作業を行わなくてはならないと確信するに至った。

以上のような理由により、本邦ではこれまでほとんど行われていなかった近代黒海地域史研究に本格的に着手することとなった。

## 2. 研究の目的

近代黒海地域史研究は日本では未着手の分野であるため、まずはその基礎を固めるべく、地道な実証研究を積み重ねてゆく必要があると考えた。その手始めとして本研究では、18世紀後半から19世紀初頭の時期に注目し、オスマン帝国の勢力圏としてイスラーム世界に含まれていた黒海地域に西欧諸国とロシアが進出し、三世界がせめぎ合う黒海国際関係の構造が形成されてゆく具体的なプロセスを、西欧・ロシア・オスマンそれぞれの史料に基づいて明らかにすることを目指した。

明らかにすべき具体的な問題として、大きく二つの問題に注目した。一つは、西欧諸国とロシアの、黒海を取り巻くバルカン・クリミア半島・カフカースへの政治外交的進出の問題、もう一つは、これまで研究を行ってきたワラキア・モルドヴァをめぐる国際化と上述の黒海の国際化の動きとの関連の問題である。これらについて研究対象時期を、オスマン帝国が黒海周辺地域を支配していた1774年(キュチュク・カイナルジャ条約)までの時期、そうしたオスマン帝国による黒海支配にロシアとハプスブルク帝国が風穴を開け、黒海地域の問題にこの3つの帝国が関わることとなった1774年から18世紀末までの時期、イギリスとフランスも黒海地域に本格的に進出し、黒海地域をめぐる問題が多国化・複雑化する1800年からウィーン体制成立前夜の1815年頃まで、の三つに大まかに分け、からへの変遷過程を実証的に明らかにすることを目指した。

以上の作業を行うことによって、現代黒海国際関係の歴史的起源としての近代黒海国際関係の初期の諸相を示し、黒海周辺の「地域性」を考察することが本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

本研究の特色は、近代黒海国際関係構築の初期の諸相を、オスマン側史料、ロシア側史料、そしてハプスブルク帝国をはじめとする西欧側史料の三方面の史料を突き合わせることによって、従来的一方あるいは二方から

の視点に基づく研究の限界を乗り越えつつ、この問題を複眼的に考察することにある。本研究課題に関する一次史料のうち、刊行されているものも存在するがそれは一部に過ぎず、多くは未刊行のため、各国の文書館における史料調査と収集が研究遂行に当たっての中心的な作業となった。その他、黒海周辺地域を中心に大学・研究所の訪問や学会への参加を通じて、本研究課題に関連する研究を行っている研究者から専門的知識の提供を受けるように努めた。

具体的な研究方法としては、まず本研究課題に関する先行研究文献の収集と分析から研究を開始した。18・19世紀を中心に、オスマン帝国による黒海および黒海周辺地域支配、ロシアの対黒海政策、西欧諸国の東方政策、黒海周辺地域の政治社会、などに関する先行研究文献について、国内の大学図書館での調査や書籍の購入を通じて、また日本で購入困難な文献については現地調査時にそれぞれ入手し、これらの文献の分析を通じて今後明らかにすべき具体的な問題点を洗い出した。これらの作業は研究開始年度である平成23年度を中心に実施した。

続いて、本研究の中心となる一次史料の収集と分析に着手した。調査はトルコのイスタンブールとトラブゾン、グルジア(ジョージア)のトビリシ、クリミア半島のシンフェローポリ、ルーマニアのブカレスト、ブルガリアのソフィア、フランスのパリなどで実施し、未刊行の一次史料を中心に本研究課題に関連する資料の収集を行った。その他、国内のいくつかの大学に所蔵されている刊行一次史料及びマイクロフィルム類の調査も行った。収集した史料は多岐にわたるが、オスマン帝国、ロシア、フランスの外交史料が中心である。そして、収集したこれらの史料の読み込みと分析を進めた。

分析を進めるに際し、他の研究者から助言を受けるべく大学・研究所の訪問や学会への参加も行い、オスマン・ルーマニア関係史が専門のブカレスト大学名誉教授のミハイ・マキシム氏、オスマン・ヨーロッパ関係史が専門のトラブゾンの黒海工科大学教授のアラッディン・ヤルチュンカヤ氏、クリム・ハーン国史の専門家であるセルヴェル・エブベキーロフ氏、その他の研究者から専門知識の提供を受けた。

#### 4. 研究成果

(1)成果として三点挙げる事が出来る。一点目として、本研究以前から取り組んできたワラキアとモルドヴァをめぐる国際関係の研究を、黒海およびその周辺地域をめぐる国際関係の中に位置づけたことである。ワラキアとモルドヴァはオスマン帝国の付庸国であり、18世紀にバルカンで最も早く列強の影響力が及んだ地域であるが、この二つの公国をめぐるオスマン・ロシア・西欧諸国間の政

治外交関係の展開について、ロシアと西欧諸国の黒海地域進出政策とオスマン帝国によるそれへの対応の中で改めて考察し、従来列強のバルカン進出という文脈の中で論じられていたこれらの事象を、「黒海地域の国際化」という枠組みの中で捉えなおしたことである。例えば、1783年にワラキア・モルドヴァ両公国の待遇に関して、ロシアとハプスブルク帝国のイスタンブール駐在代表がオスマン政府に要求を突きつけるが、これはハプスブルクの黒海通商参入およびロシアの黒海通商権拡大と強く関連するものであったこと、また、ほぼ同時期に見られる両帝国によるワラキアとモルドヴァへの領事館・通商代表部開設要求も、黒海通商との関連で論じられるべきであることが明らかとなった。その後1790年代から1800年代にかけてフランスとイギリスも両公国への領事館設置に成功するが、これについても黒海通商との関連で捉えるべきであることを示した。これらの問題は、主として2013年に出版した単著の中で論じた。

(2)オスマン帝国の黒海地域の支配のあり方として、直接支配地はアナトリア、黒海西岸、そしてクリミア半島の南岸のみであり、それ以外の地域は間接支配であった。そこで黒海周辺に存在する付庸国とオスマン中央政府間の宗主・付庸関係に注目し、18世紀半ばまでのその関係が、ロシアや西欧列強が進出を開始する18世紀後半以降いかに変容したかについて、ワラキア・モルドヴァとクリム・ハーン国を例に検討した。前者に関しては、ロシア・ハプスブルク両帝国が、18世紀半ばまで慣例として明文化されていなかった両公国のオスマン政府に対する権利・義務関係を明文化するようオスマン帝国に圧力をかけることにより、オスマン・両公国間の宗主・付庸関係を弛緩させることを目指した点については本研究開始以前にすでに明らかにしていたが、今回クリム・ハーン国のケースを検討し、これについてもロシアが従来のオスマン・クリム間の宗主・付庸関係に積極的に介入したことを明らかにした。そして、ワラキアとモルドヴァの例を中心に、これらのオスマン帝国における付庸国の問題を論じた論考を2014年出版の『宗主権の世界史』の中で発表した。

このように、18世紀の黒海地域の歴史を、ロシア・西欧列強進出に伴うオスマン帝国の付庸国支配の変容過程と捉える見方は、近代黒海地域史の展開と黒海国際関係の形成過程を考える上で非常に重要と考えており、引き続き研究を進める予定である。

(3)上の二点の成果を踏まえ、18世紀後半から19世紀初頭にかけての黒海地域の歴史的展開を、長い黒海地域史の中に位置づける試みを行った。すなわち18世紀後半という時期を、一つの政治勢力が主として地中海側か

ら黒海周辺地域の多くを支配し、黒海におけるヘゲモニーを握る前近代的な黒海地域の性格が、南下するロシア、東方拡大を目指す西欧諸国、これに対抗するオスマン帝国という三勢力のせめぎあいの地としての近代的な性格へと移行する過渡期と捉え、その変容過程を中心に、古代から 20 世紀初頭までの黒海地域を概観する論文を執筆した。このような、黒海を一つの地域と捉え、その周辺地域の歴史を概観した論考は本邦ではおそらく初めてであると思われる。この論考は、2016 年度中に出版される『黒海地域の国際関係』のうちの一章として公になる予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 4 件)

Akitsu MAYUZUMI, The Ayans of Northern Bulgaria and the Danubian Principalities: The Viewpoint of the 'Eastern Question', 5th International Balkan Annual Conference (IBAC), 2015.11.27, Sofia(Bulgaria).

Akitsu MAYUZUMI, The Russian Annexation of Crimea (1783) in the Ottoman-Russian Rivalry over the Black Sea, ICCEES IX World Congress, 2015.8.4, 神田外語大学(千葉県千葉市).

Akitsu MAYUZUMI, The Establishment of the Russian consulates in the Danubian Principalities in the 1780s and the Ottoman Empire, 4th International Balkan Annual Conference (IBAC), 2014.10.16, Bucharest(Romania).

黛秋津, 「日本におけるウクライナ史研究」(ロシア語) 第 19 回国際学術会議『ヴィシユホロドの古代』2013.5.30, Vyshhorod(Ukraine).

[図書](計 4 件)

六鹿茂夫編著, 著者黛秋津他 10 名, 名古屋大学出版会『黒海地域の国際関係』2016 出版.

岡本隆司編著, 著者黛秋津他 7 名, 名古屋大学出版会『宗主権の世界史』2014 年, 全 412 頁, 担当部分 22-48, 119-148.

黛秋津著, 名古屋大学出版会『三つの世界の狭間で 西欧・ロシア・オスマンとワラキア・モルドヴァ問題』2013 年, 全 272 頁.

鈴木董編著, 著者黛秋津他 16 名, 山川出版社『オスマン帝国史の諸相』2012 年, 全 476 頁, 担当部分 148-171.

[その他]

黛秋津, 「( 耕論 ) 欧州の境界」朝日新聞, 朝刊 17 面. 2015.10.8.

黛秋津, 「クリミア半島 民族の交差点」朝日新聞, 夕刊 6 面, 2014.4.14.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

黛 秋津 (MAYUZUMI, Akitsu)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号: 00451980